

流浪の賦 (2) - “Tasso の歎き” -

G. G. Byron

楠 本 哲 夫

‘My soul was drunk with Love’

わが心は愛に酔いしれて

‘The Prisoner of Chillon’ ‘Mazeppa’ は Byron が追放の身として 祖国英国に袂別をつけ、流浪の境涯をスイス、イタリアー逗留時代、しづかに心の傷をいやす間、みづからの心境をたくした自己投影の、最初の作品である。

‘The Lament of Tasso’ (1817) は、もっと、その自己投影の影が濃くなっている。

Torquento Tasso (1544-95) 自身、イタリアーの詩人であり、その数々の名作により、名声を得たが、Ferrara 公 Alphonso II の妹 Leonora を恋し多くのソネットを捧げているが、精神に異常を来たし 流浪の末、ローマで没した。

その幽閉の身が愛ゆえであり、だから、Byron が愛を剥奪されたことを意味している。と 世評は述べてゐる。即ち Byron は、彼を虐待し、不当に扱った連中から あたかも 狂人であるかの如き 処遇をうけた。

Byron の場合、Annabella との結婚が不幸に終った時点において 英国社会は——、慧星の如く出現したこの天才詩人、若きプリンス Byron に 熱狂し酔いしれた貴族社会はとくに——今や、掌をかへす如く、Byron に対しこれを白眼視し 人非人、不道德漢、狂人 呼ばわりし、誹謗し、迫害し、祖国

・永久追放を宣言し、なお、かつ 憎悪の^{はむら}炎を かきたてたのである。

Lady Byron との ‘Separation’ を機として このように急転回した Byron の背負はねばならなかった悲運に対して 諸の因を探るとき、^{さすが}流石に、その最たるものとして、Byron が 身を賭して 叛逆した みづから育った、あの英国貴族社会の、牢固として抜くべからざる大いなる陋習を 挙げることができるだろう。権力と栄耀を誇った英国貴族社会 は 専横なる貴族社会独自の道徳律を固持し むしろ無法者なる如く 貴族の特権をほしいままに濫用し行使し、みづからの利害のためにのみ、大衆を無視し 大衆生活を犠牲にしてまでおのが生活を enjoy して はばかりとこがなかった。それゆえに 貴族たる者は みづからの恥部を大衆の前に決してさらしてはならなかった。これは 貴族として 遵守しなければならぬ一大戒律として 厳しく課せられた不文律であり これを犯すものは、異端者として、^{はみだし者}として 即刻、社交会から閉めだし、貴族社会より追放の憂き目にあわねばならなかった。

Byron は ^{はみだしもの} であった。いや、みづから、この貴族社会の陋習を絶つべく 敢然とたちあがった 革命児、異端児であった。みづからは英国において 最も古き、由緒ある名門貴族 Byron 家 の血を誇りながら、同時に、この陋習を打破すべく、心に大いなる矛盾をはらみつつ 虐げられた大衆にくみしつつ、傍若無人の、己の欲する道を突走った。公的にも、そして、私的にも おのが心のもゆるままに その激情に終始していささかも悔ゆるところはなかった。 ^{かくすればかくなる}末路を 熟知しながらも Byron は みづからの揺れる 激動する心に背きえなかった。 かくて——

‘Lament of Tasso’ は、 Annahella との、わづか一年の結婚生活——そして 離別により、貴族社会にふりまかれたスキャンダル、 Byron への 誹訪、憎悪、人非人、不道德漢、悪魔呼ばわりに じっと耐えた Byron の悲哀、揺れ動き、荒れた激動の渦 の、まさしく、投影の唄であった。

I.

Long years! —It tries the thrilling frame to bear
 And eagle-spirit of a Child of Song—
 Long years of outrage—calumny—and wrong;
 Imputed madness, prisoned solitude,
 And the Mind's canker in its savage mood,
 When the impatient thirst of light and air
 Parches the heart; and the abhorred grate,
 Marring the sunbeams with its hideous shade,
 Works through the throbbing eyeball to the brain,
 With a hot sense of heaviness and pain;

10

永い才月よ！ それはうち震え耐える心に
 そして詩人の鋭い魂に ^{うたびと} 試練を与へた。
 辱しめの永い才月よ——中傷——そして悪の：
 帰囚された狂気、幽閉された孤独
 そして荒んだ心の中に巣喰った癌腫病
 そのとき、光と大気への渴望が
 心をやきつくした、そして憎しみの鉄格子は
 日の光を 忌わしい影で そこない
 うち震える眼球を通して脳髄へと
 重く苦しさと 苦しみの渦巻く激情をつたえゆく

ここで渦巻が ^{うずまき} ぐるぐると旋回する。長く続く 複雑なムードが ライムの
 複雑さゆえに ‘eagle-spirit’ ‘Child of Song’ の自由奔放さから せばまりゆ
 く濡斗状のものを通して ‘hideous shade’ ‘the throbbing eyeball’ そして
 ‘hot sense of heaviness and pain’ へと 徐々に旋回してゆく。

この構成はすばらしい。だが 問題は——一つの詩の中で、これは 一度しか、有効に用いられえないのである。この詩型はソネットにおいて ふさわしいが、ソネットよりも長い詩においては 強調のための規準を設定することは不可能である。ここで用いたライムの図式が この詩のもつ、熱っぽい、いくくんだ、半ば 錯乱的ムードに 見事に、ぴったりとあっている。

それは あたかも 急速にぐるぐる旋回している 濡斗の内壁の、いく本もの筋のように、広がりゆき 交錯し それぞれのライムが ふたたび集ってめまぐるしい旋回の効果を示している。

即ち、a b b c c a d e f f..... 等々の効果を、この詩の第一節の32行に対して きわめて、巧みに妙をえて 発揮し伝えてゆく。

And bare, once, Captivity displayed
 Stands scoffing through the never-opened gate,
 Which nothing through its bars admits, save day,
 And tasteless food, which I have eat alone
 Till its unsocial bitterness is gone;
 And I can banquet like a beast of prey,
 Sullen and lonely, couching in the cave
 Which is my lair, and—it may be—my grave.
 All this hath some what worn me, and may wear,
 But must be borne. I stoop not to despair;
 For I have battled with mine agony,
 And made me wings wherewith to overfly
 The narrow circus of my dungeon wall,
 And freed the Holy Sepulchre from thrall;
 And revelled among men and things divine,

And poured my spirit over Palestine,
In honour of the sacred war for Him,
The God who was on earth and is in Heaven,
For He has strengthened me in heart and limb.
That through this sufferance I might be forgiven,
I have employed my penance to record
How Salem's shrine was won, and how adored.

もし 旋回する漏斗^{じょうど}の中の 目まぐるしく交錯する、幾條かの筋^{すじ}を じっと
観察するとき 一定のライムの型——たとえば 6つのグループ a b b c c a
——をほどこしたいと思うなら、この対象型は 欺瞞^{わか}的だと 解^{わか}るだろう。

つまり、Byron の 連の進展は 正真正銘、長期にわたっている。

この詩の9連のそれぞれが bolge——袋、乱雑な騒がしい場所、ダンテ『神
曲』の裏^{たい}——なので めくるめく 忙しい乱雑な裏^{たい}、ぐるぐるとものすごい
スピードで旋回する、漏斗^{じょうど} となっている。

もし我々が ここで 母音の点のみから、ライムを考えると き 循環の使用
がいっそう目立っている。つまり——

第一連で わづか6の terminal sounds を使用して、その場合

long [˙]a 音

long and short [˙]i 音

long and short [˙]o 音 が支配的となっている。

これが 強迫^{きやうぱく}的な、執拗^{しつごう}な、効果をあげている。だからもし、これがずっと
最後迄 持続^{じしつ}できていたとしたら、まさにこの詩が 一大傑作となり得たで
あろう。だがしかし—— その成功は自滅^{じめつ}的で、それは——あたかも 没^{いり}つ陽
をじっと観察しつづけ、薔薇^{ばら}の芳香を嗅ぎつづける如きである。 第一連がす

ざれば、はや、我々の注意関心は うすれゆく。

事実、第二連では その勢は衰えゆき、一連の平凡な、陳腐な、2行連句へと移行し、あの、螺旋状の推進力は失われてゆく。

II.

But this is o'er—my pleasant task is done:—
 My long sustaining Friend of many years!
 If I do blot thy final page with tears,
 Know, that my sorrows have wrung from me none.
 But Thou, my young creation! my Soul's child!
 Which ever playing round me came and smiled,
 And wooed me from myself with thy sweet sight,
 Thou too art gone—and so is my delight:

40

だが これは終った。私の楽しい仕事は了った。——

かぐく 育んできた 私の友垣^{ともがき}の、いく日いく歳^{とせ}!

その最後の頁を 私の涙で 汚^{けが}すとも

知れよ、私の哀しみは 私から何ものも

絞りとしてはくれぬことを。

だが汝! 私の幼い創造の児よ。私の魂の児よ!

それは いつもやってきて、 私の回り^{まわ}で戯れながら 微笑^{ほほえ}んだ

そして その優^{やさ}しいすがたで 私においすがった

そのおまえも もういない——かくて私の歓びは逝^きった

このように 第二連は 展界してゆく。そして 第一連の調子恢復の見込は全くない。 お得意の 'Soul of my thought' のテーマ (Childe Harold, III, vi) の あの芸術的創造も この部分から 失せてゆく。

And therefore do I weep and inly bleed
 With this last bruise upon a broken reed.
 Thou too art ended—what is left me now?
 For I have anguish yet to bear—and how?
 I know not that—but in the innate force
 Of my own spirit shall be found resource.
 I have not sunk, for I had no remorse,
 Nor cause for such: they called me mad—and why?
 Oh Leonora! wilt not *thou* reply?
 I was indeed delirious in my heart
 To lift my love so lofty as thou art;
 But still my frenzy was not of the mind:
 I knew my fault, and feel my punishment
 Not less because I suffer it unbent.
 That thou wert beautiful, and I not blind,
 Hath been the sin which shuts me from mankind;
 But let them go, or torture as they will,
 My heart can multiply thine image still:
 Successful Love may sate itself away;
 The wretchéd are the faithful; 'tis their fate
 To have all feeling, save the one, decay,
 And every passion into one dilate,
 As rapid rivers into Ocean pour;
 But ours is fathomless, and hath no shore.

第三連は この消え失せたものを ^ク ^ド ^{デアートル} a coup de theatre——急轉換——によつて取戻そうとする。 即ち——

牢獄¹⁾の他の箇所から狂人どもの叫びごえが突然きこえてくる。それは 彼らの苦悶ゆえの、野獣の如き罵詈雑言の連呼といり混っている。—— Webster はく The Duchess of Mlti > の中でこれを より巧みに うたいこなしている——だが Tasso の 個人的、私的苦悶を同じくする仲間の世界へ^{ひろ}展めようとするバイロンの試みはちぐはぐで 途中で挫折し 結実していない。

III.

Above me, hark! the long and maniac cry
Of minds and bodies in captivity.
And hark! the lash and the increasing howl,
And the half-inarticulate blasphemy!
There be some here with worse than frenzy foul,
Some who do still goad on the o'er-laboured mind, 70
And dim the little light that's left behind
With needless torture, as their tyrant Will
Is wound up to the lust of doing ill:
With these and with their victims am I classed;
'Mid sounds and sights like these long years have passed;
'Mid sights and sounds like these my life may close:
So let it be—for then I shall repose.

Note (1) [Tasso's imprisonment in the Hospital of Sant' Anna lasted from March, 1579, to July, 1586. The *Gerusalemme* had been finished many years before.]

Tasso の Hospital of Sant' Anna での監禁は 1579年3月から1586年7月まで続いた。＜エルサレム＞は、Tasso によって書きあげられて一大叙事詩として1575年、公表されて Tasso の名声はすでに高まっていた。

IV.

I have been patient, let me be so yet;
 I had forgotten half I would forget,
 But it revives—Oh! would it were my lot 80
 To be forgetful as I am forgot!—
 Feel I not wroth with those who bade me dwell
 In this vast Lazar-house ¹⁾ of many woes?
 Where laughter is not mirth, nor thought the mind,
 Nor words a language, nor ev'n men mankind;
 Where cries reply to curses, shrieks to blows,
 And each is tortured in his separate hell—
 For we are crowded in our solitudes—
 Many, but each divided by the wall, 89
 Which echoes madness in her babbling moods,
 While all can hear, none heed his neighbour's call—
 None! save that One, the veriest wretch of all,
 Who was not made to be the mate of these,
 Nor bound between Distraction and Disease.
 Feel I not wroth with those who placed me here?
 Who have debased me in the minds of men,
 Debarring me the usage of my own,
 Blighting my life in best of its career,
 Branding my thoughts as things to shun and fear? 90
 Would I not pay them back these pangs again,
 And teach them in ward Sorrow's stifled groan?
 The struggle to be calm, and cold distress,
 Which undermines our Stoical success?
 No! —still too proud to be vindictive—I

Have pardoned Princes' insults, and would die.

Yes, Sister of my Sovereign! for thy sake

I weed all bitterness from out my breast,

It hath no business where *thou* art a guest:

Thy brother hates—but I can not detest;

Thou pitiest not—but I can not forsake.

110

Note (1) lazar は begger, とくに らい病にかかった乞食

Byron には解っていたのだが、

‘And each is tortured in his separate cell—

For we are crowded in our solitudes—’

おのおのは それぞれの独房の中で さいなまれる——

われわれは みづからの孤独の中に ^{ひし} 薙めいているゆえに——

それにも不拘、＜The Lament of Tasso＞ は深く動いてゆく、苦悶と挫折の図式を主張として押し通している。

たとえ、この詩が 偉大な詩でなくて、Coleridge の 所謂、＜Kubla Khan＞ (a psychological curiosity) なるものであるならば、その罪は、すでに指摘された如く、一つには その情緒をもった、この詩の進展にではなくて、Byron 自身の情緒に適当な構造的詩型を工夫しようとして示した Byron の特異の技巧のせいであり、また、一つには、Byron の描こうとする＜世界＞にかの要素—— 光、大気、陽光、山、海—— の不在のせいである。

そして これらの要素こそ、実に、おそらく、いままでうんざりするほど唄

われてきて、Byron 詩にとって、たびたびの大成功の 原因だったはずである。

そして外部的に^{まきつ}摩擦がなくなつてゆくため、その旋回は徐々に破滅的に、この詩の 終結にむかつて速度をゆるめてゆく。

Byron は 投影の詩人である。その心の激情を 熱血を 冥想を 静けさを 風ぎを 空白を 旋風を 龍卷きを 炎を 噴煙を 溶岩流を 瞬時も停止させ、滞ることなく たとえれば 滾滾として 湧きいづる泉の如く 影も光も その心の反映として 唄い継いだ詩人である。Byron は海が好きだった。Byron は 生涯を海を眺めることのできる家にすんだ。流浪、追放の生活の時代は好んで 海を愛し、海を眺めることができる家にすんだ。

‘母なる海’に、みづからの心を投影し、冥想することに、幼き日よりの 苦悩に耐えた 万感の思いが 去来したことであろう。嵐のさ中に、大地震のさ中に、周囲の友が あわて、恐れ、おののく ときにも 悠然と詩筆をとった。＜Lament of Tasso＞は Byron 自身の心の投影である。

あたかも これを意識する如く Byron は第四連で

牢獄から 自由なる大地へと この詩の主軸を移しゆき、わきみちにそれた余話を導入している。そしてそうすることによって、Byron の お得意の冥想の分野を開拓してゆく。

つまり、Tasso は 苦痛の巧妙な仕掛けを打ちくたく愛の力を考えている。

V.

Look on a love which knows not to despair,
But all unquenched is still my better part,
Dwelling deep in my shut and silent heart,
As dwells the gathered lightning in its cloud,

Encompassed with its dark and rolling shroud,
Till struck,—forth flies the all-ethereal dart!
And thus at the collision of thy name
The vivid thought still flashes through my frame,
And for a moment all things as they were
Flit by me;—they are gone—I am the same.
And yet my love without ambition grew;
I knew thy state—my station—and I knew
A Princess was no love-mate for a bard: ¹⁾
I told it not—I breathed it not—it was
Sufficient to itself, its own reward;
And if my eyes revealed it, they, alsa!
Were punished by the silentness of thine,
And yet I did not venture to repine.
Thou wert to me a crystal-girded shrine,
Worshipped at holy distance, and around
Hallowed and meekly kissed the saintly ground;
Not for thou wert a Princess, but that Love
Had robed thee with a glory, and arrayed
Thy lineaments in beauty that dismayed—
Oh! not dismayed—but awed, like One above!
And in that sweet severity there was
A something which all softness did surpass—
I know not how—thy Genius mastered mine—
My Star stood still before thee:—if it were
Presumptuous thus to love without design,
That sad fatality hath cost me dear;
But thou art dearest still, and I should be

Fit for this cell, which wrongs me—but for *thee*.
 The very love which locked me to my chain
 Hath lightened half its weight; and for the rest,
 Though heavy, lent me vigour to sustain,
 And look to thee with undivided breast,
 And foil the ingenuity of Pain.

＜愛＞は——

私の閉じ込められた、沈黙した心の中に深く巢喰うて、
 あつめられた光が 雲の中にすまうように——
 その暗い変転しゆく幕^{とぼり}に^{かこ}囲まれて、いつか突然
 すべてエーテルの如き征矢を放つ。

Note (1) Tasso が Leonora d'Esten への 身を焦がす恋情へ耽溺し 秘かに、それを育みつづけたことは たしかだ。“Sister of his Sovereign” と Tasso が Hospital of Sant' Anna に幽閉されたことは全く無関係である。Tasso とこのプリンセスは13年以上もの間、知り合った仲で、彼女は、Tasso よりも7歳年上で、1579年3月には花の色香の盛りであった、42歳近くであったことは、問題点である。そして、Tasso がさらに5年間幽閉されていたことも、この伝説の真実を強く否定する論議となっている。とまれ、このプリンセスは、すばらしく、美しい女性であり、Tasso の疵護者として、そして恩人であったことはたしかだ。そして、ソネットの、カンツォーネの主題となっている女性である。だが、Tasso が正気を失い、自由を失ったのは、彼女の湛えていた、妖しい美しさのゆえではない、ということが真相であろう。

VI.

It is no marvel—from my very birth
 My soul was drunk with Love, —which did pervade
 And mingle with whate'er I saw on earth:
 Of objects all inanimate I made
 Idols, and out of wild and lonely flowers,

And rocks, whereby they grew, a Paradise,
 Where I did lay me down within the shade
 Of waving trees, and dreamed uncounted hours,
 Though I was chid for wandering; and the Wise
 Shook their white aged heads o'er me, and said
 Of such materials wretched men were made,
 And such a truant boy would end in woe,
 And that the only lesson was a blow;

すこしも不思議ではないが——私の出生のときから
 私の魂は 愛に酔いしれていて——それは浸透して
 私がこの世で見たすべてのものと 混ざり合っていた。
 あらゆる生命なきものより、私は創造^{つく}ったのだ、 偶像を。
 そして野に咲く、^{さび}寂しい花からも。
 そして その傍^{そば}にあった岩からも、^{パラダイス}楽園を創造^{つく}った。
 そして そこに私は横わり、揺れる木蔭で
 無限の‘時’を 私は夢みた。
 私はさまよい歩くことで たしなめられはしたが。
 そして賢者がその白髪^{みじ}の頭をふって 云った。
 ‘そのような素材から 惨^{なま}めな人間は創られたのだ。
 だからそのような怠^{なま}け者は 歎きの中に果て
 しかも 唯一^{おしえ}の教訓は 打擲^{ちようちやく}のみじゃ’ と。

And then they smote me, and I did not weep,
 But cursed them in my heart, and to my haunt
 Returned and wept alone, and dreamed again
 The visions which arise without a sleep.
 And with my years my soul began to pant

With feelings of strange tumult and soft pain;
 And the whole heart exhaled into One Want,
 But undefined and wandering, till the day
 I found the thing I sought—and that was thee;
 And then I lost my being, all to be
 Absorbed in thine;—the world was past away;—
Thou didst annihilate the earth to me!

岩と花、^{いのち}生命なきものと ^{いのち}生命あるものとが Blake 的 一連の推移の中にしっかりと結びあってそれが われわれを Aberdeen の、いや、Harrow 時代の少年 Byron に、—— Sorrento の少年 Tasso に対するよりも——より 近づけてくれている。

そして、‘Drunk with Love’ において < objects all inanimate > つまり < objects not dead but without a human soul > —— (死んではないが、魂のぬけたもの) と (愛) との結びつきの中で、我々は次の如く感ずる Childe Harold 的 Byron に 帰ってゆくのである。

All is concentrated in a life intense,
 Where not a beam, nor air, nor leaf is lost. (III, lxxxix)

すべては 強烈な生の中に集中されそこでは
 一すじの光も、大気も、一枚の葉も失われていない。

われわれが < Byron の心情 > を理解するにあたって 意義深いことだが、この詩の推移は ここで一瞬、(実に、強調のため) Byron の、みづからの、苦境の、ほろ^{にが}苦い思いだが、—— Tasso の実感を中断させている。

少年時代 望んだ孤独と、牢獄の中の、強制の孤独との対照、 宇宙へと、

＜無限に^{ひろが}展りゆく愛＞と みづからの＜魂を^{くら}喰い^{あさ}漁る 激しい恋情＞ との対照が——

VII.

I loved all Solitude—but little thought
 To spend I know not what of life, remote
 From all communion with existence, save
 The maniac and his tyrant;—had I been
 Their fellow, many years ere this had seen
 My mind like theirs corrupted to its grave.
 But who hath seen me writhe, or heard merave?
 Perchance in such a cell we suffer more
 Than the wrecked sailor on his desert shore;
 The world is all before him—*mine is here*,
 Scarce twice the space they must accord my bier.
 What though *he* perish, he may lift his eye,
 And with a dying glance upbraid the sky;
 I will not raise my own in such reproof,
 Although 'tis clouded by my dungeon roof.

VIII.

Yet do I feel at times my mind decline,
 But with a sense of its decay:—I see
 Unwonted lights along my prison shine,
 And a strange Demon,¹⁾ who is vexing me
 With pilfering pranks and petty pains, below
 The feeling of the healthful and the free;
 But much to One, who long hath suffered so,
 Sickness of heart, and narrowness of place,

And all that may be borne, or can debase.
 I thought mine enemies had been but Man,
 But Spirits may be leagued with them—all Earth
 Abandons—Heaven forgets me; —in the dearth
 Of such defence the Powers of Evil can—
 It may be—tempt me further, —and prevail
 Against the outworn creature they assail.
 Why in this furnace is my spirit proved,
 Like steel in tempering fire? because I loved?
 Because I loved what not to love, and see,
 Was more or less than mortal, and than me.

Note (1) Tasso は監禁中、独房から Maurizio Cataneo に宛てた、1585. 12. 25 (12. 30も再度) 付けの手紙の中で、彼を悩ませつづける幻覚症状を Demon <悪霊>のいたずら、所業として具体的に詳細にのべ、訴えている。

IX.

I once was quick in feeling—that is o'er;—
 My scars are callous, or I should have dashed
 My brain against these bars, as the sun flashed
 In mockery through them; —If I bear and bore
 The much I have recounted, and the more
 Which hath no words, —'t is that I would not die
 And sanction with self-slaughter the dull lie
 Which snared me here, and with the brand of shame
 Stamp Madness deep into my memory,
 And woo Compassion to a blighted name,
 Sealing the sentence which my foes proclaim.
 No—it shall be immortal! —and I make

A future temple of my present cell,
Which nations yet shall visit for my sake.
While thou, Ferrara! when no longer dwell
The ducal chiefs within thee, shalt fall down,
And crumbling piecemeal view thy hearthless halls,
A Poet's wreath shall be thine only crown,—
A Poet's dungeon thy most far renown,
While strangers wonder o'er thy unpeopled walls!
And thou, Leonora! —thou—who wert ashamed
That such as I could love—who blushed to hear
To less than monarchs that thou couldst be dear,
Go! tell thy brother, that my heart, untamed
By grief—years—weariness—and it may be
A taint of that he would impute to me—
From long infection of a den like this,
Where the mind rots congenial with the abyss,—
Adores thee still; —and add—that when the towers
And battlements which guard his joyous hours
Of banquet, dance, and revel, are forgot,
Or left untended in a dull repose,
This—this—shall be a consecrated spot!
But *Thou*—when all that Birth and Beauty *throws*
Of magic round thee is extinct—shalt have
One half the laurel which o'ershades my grave.
No power in death can tear our names apart,
As none in life could rend thee from my heart.
Yes, Leonora! it shall be our fate
To be entwined for ever—but too late!

第八連と第九連で Tasso を 癡狂と自殺の思いへと 駆りたてる。そしてこれは、Byron の場合 Manfred から Sardanapalus に至る作品中の悲劇の主人公の最後の解決、結末なのであるが——。

しかし ここでは主人公は 名声を夢みることの思いに支持され、ゆえにこの結末にあらがった。

この詩の構想の中で たがいに ^{あつれき} 軋轢する、これらのモチーフこそ、主要動機となっており、ある程度 外部的推進力をとり戻し、この詩を動かし続けるのであるが、それは Byron 詩においては 内的なものと外的なものと＜結実的交渉＞、＜調和的律動＞をつぐなうことはできないのである。

とまれ、——Lament of Tasso に、Byron の 荒れ狂った日の 嵐の 過去が鮮烈に われわれの胸に 蘇えり、去来する。それは 濃き Byron の 自己投影である。

世間が Byron を——‘畸形の Richard III 世’ ‘無神論者’ ‘反逆児’ ‘悪魔’——として悪しざまに 呪い、連呼し、ヒステリックに狂乱し 憎悪したとき、この狂態に敢然として戦闘的に立ち向かい これを はねかえした。

‘私の心の奥底には、私に敵対する者を はね返す闘志が 漲っているのです’ とかいたが それは——詩人の脳裏をかすめ、そして ^{とだま} 反響して、遂に Childe Harold の 最後の canto にとび出してきた あの文句であった。

But there is that whithin me which shall tire Torture and Time, and breathe when I expire...

だが しかし——

私の心の奥底には

あの ‘苦悩’ と ‘時’ を
ヘトヘトに 疲れさせ、
そして それは——
私が 呼吸 絶ゆるときも
息づき続けるもの——が
秘んで いるのだ！

熱血詩人 Byron は 己が不滅の闘魂を、自らの筆で 力強く謳い 讃えて
いる。

だが しかし——

祖国を追はれて 流浪の旅をつづけた Byron にとって その胸中を去来
したもの、 瞬時も 停止することがなかった、心の龍巻、旋風、渦巻 は
荒れ狂った、あの、漏斗の ‘裏’ であり “Tasso の歎き” の、情であった。
＜‘Lament of Tasso’＞は Byron の猛り狂い渦巻いた激情の、暗き、濃き、
投影であった。

Byron の自己投影としての＜Lament of Tasso＞の恐ろしき地獄絵図は
Tasso の 若かりし日、みづから描いた自画像と 見事に対比されているが、
その若き日の Tasso に、実に 自然と冥想が 彼の狂おしき 激しい ロマ
ンチックな 感動的天才の 閃きを形成している。

＜Lament of Tasso＞の 傑出した、すばらしさは 実に——高貴な、凶れ
人の魂の、押し寄せてくる上げ潮の、そして、次第に衰退してゆく引き潮の、
交錯する、渦潮なのである。つまり——

Byron の激情は 突如として、しばしば遠き彼方より来りて、ときに 静か

な大気がいきづき、瞬時にして 嵐をよび、それが耐える夜の漆黒の如き闇^{やみ}に
 つつまれ、その暗き陰は 突如として、燐然たる光輝の世界へと変転する——
 そして、猛り狂う律動が終結するとき われわれの憐憫と同情が 彼の性格の
 光輝と壮嚴の、永続的、高揚的意識 と 渾然一体となって融け合うのであ
 る。

参 考 文 献

- 1) Elizabeth Longford, Byron: Hutchison.
- 2) Ernest Hartley Coleridge. The Poetical Works of Lord Byron: Lewis
 Prints.
- 3) Leslie A. Marchand, Byron's Poetry: John Murray.
- 4) Bernard Blackstone, Byron: Longman.
- 5) John D. Jump, Byron: Routledge & Kegan Paul.
- 6) Lafcadio Hearn, The English Romantic Poets: 北星堂。